

## 自己をならう

『正法眼蔵随聞記』の勧め

荻原 欒

(哲学)

(一)

だれしもそうかも知れないが、小学校から高校、大学まで長い間、毎日毎日学校に通い、たくさん先生のからいろいろなことを習ってきたのに、さてその中で、今でも鮮明に憶えていることとなると、そう多くはない。大抵の場合それは、勉強の内容より、ふと漏したその先生の家庭の事情であつたりするのである。

私自身についていえば、高校の頃、ある先生が次のように述べたのを今でも憶えている。曰く、「学ぶとは、普通いわれているように、ものを憶えて賢くなることではなく、逆にどんどん忘れてバカになることである。生徒を全員バカにできれば、理想的教育である」。このコトバのとおりとすれば、大学に入学して段々バカになつて卒業すれば、これはまた大いに学んだことにもなるのである。諸君の中にも、本学に来て、その意味で日々順調に学びつつある者も少なくなからう。

この小文を入門として、皆にもぜひ読んでもらいたいと

思っている。「正法眼蔵随聞記」は、鎌倉仏教の一方の代表者、道元(一一〇〇—一一五三)が折にふれ語つたことを、弟子の懐装が聞き書きしたものである。道元の主著は、難解とされる「正法眼蔵」九五巻であるが、この二つの書物の関係はちよつと、鎌倉仏教のもう一方の代表者、親鸞の主著が、「教行信証」六巻であり、「歎異抄」が弟子唯円による聞き書きであるのと似ている。

その「正法眼蔵」の「現成公案」の巻に、「仏道をならう」というは、自己をならうなり。自己をならうというは、自己をわするるなり」とある。少し堅苦しくなるが、まずこの文の意味を説明しておきたい。

ここでいう「ならう」とは「学ぶ」「知る」あるいは「知識の修得」のことである。知ることあるいは知識の修得は、通常次のような過程とされる。まず未知の対象がある。例えば物理学や経済学の対象を考えればよい。この対象は、我々がそれを知っている、知らないにかかわらず、もともと、ある固有の性質をもっている。我々はここで、この未知の対象を様々な角度から眺め(観察)、場合によってはこ

ちからからそれに刺激を与えて反応をみたり（実験）する。これによって今まで知られていなかった対象の性質が明らかになっていくのである。いわば無垢であった未知の対象が、一つ一つ新しい性質によって限定されていく、白紙に順に絵が書きあげられていくようなものである。

この過程の中で、ならない、学び、知る主体が自己である。自己がならない、学び、知るのである。これは学問だけのことでなく、日常の生活についてもそうである。生活するのが自己であり、自己が生活する。にもかかわらず、この自己は、身近かにすぎるためか、かえって意識されない。学んだり、生活したりする主体よりも、学びのあるいは生活の対象の方が、第一の関心事になるからである。ならう方より、ならう対象の方が、第一義とされる。

道元はここで、自己がでなく、自己をならうという。自己をならうのだから、自己がならったり、自己が生活したりするその自己を、今度は対象としてならうことになる。そして道元にとってはそのことが仏道である。ここで仏道といっても抹香臭いものは考えなくてよい。仏道は自己をならうことの別名なのである。

ところで、この「自己がならう」のならうと、「自己をならう」のならうでは、事柄が少し違う。すでに述べた、普通の学ぶ、知るの意味に従えば、自己をならうは、自己を対象としてよく眺めて、それまで知られなかった自己といふものの性質を見つけ出す、つまり自己を新たに限定して

いくことである。

しかし「自己をならう」のように自己がならうの対象である場合、問題は、はたして自己というものが、物理学の対象の物体やその運動、経済学の対象の人間や経済行動のようには、もともからある性質をもって向こう側にあつたものかどうかという点にある。自己とはこちら側の自分のことだから、自己についてならう時は、ここが微妙になる。もし、自己がもともと存在しないものならば、あるいは物理学や経済学の対象と同じ意味では存在しないものだとすれば、自己についての様々な限定は無意味になるのかも知れない。それだけでなく、自己については、一旦自己をこれこれのものだとして限定すると、その後は、逆に自己はこれこれのものであるはずだとして、そのように固定化されてしまふのである。もともとなかった自己に、架空の限定をして、その後はその限定から離れられなくなってしまう。自己というのは、あるいは、そういった架空の限定の集まりなのである。

このことがそのとおりとすれば、自己をならうとは、探究の結果、自己に新たな限定を加えることではなく、逆に、すでに加えられている様々な限定を一つ一つ取り外していくことである。これは自己を忘れることである。この意味で自己をならうことは自己を忘れることになる。

つまり、知り方に二つある。例えていえば一つは、対象に次々に衣装を着せていくこと、もう一つは、逆に対象か

ら順に衣装を剥ぎとっていくことである。自己を知るは後者の知り方だが、自己という衣装はしばしば嚴重なので、真実に自己を知るのは意外に難しいのである。

廻りくどい方をしたが、具体的には、自己をならうあるいは自己を忘れるとは、自己を徹底的にみつめることである。自己をじつと見つめ、自己のありのままを自覚した時、自己へのとらわれから抜け出すことができる。これが忘れることであり、ここで自覚することは忘れることになるのである。但しここは中途半端な自覚ではだめである。それではかえって新たな限定で自己を縛ることになる。忘れるでなくとらわれるになつてしまふ。ここが難しい。それ故自己をならうは、終わりのない道、日々の行なのである。

(二)

以上が長くなつたが前おきである。

さて「正法眼蔵隨聞記」の主題は二つある。一つは、仏道をならう、つまり自己をならうことは、何をさておいても第一になさなければならないことである。もう一つは、それは、それ自体が目的であつて、他の何かの手段であつてはいけないことである。自己をならうことの緊急性と純粹性である。いいかえれば、仏道をならうことの第一義性である。

ところがこの第一義であるべきことが、往々にして

我々にとっては第二義になり下つてしまふ。道元はこのことの原因を我執におく。自己をならうことは自己を忘れることであつたのに、反対に我執は自己へのこだわりだからである。「学道の人、すべからく吾我を離るべし」と言われる。

この我執によつて、ことからの緊迫性、純粹性が薄められ、第一義が第二義に落ちてしまふ。道元は「正法眼蔵隨聞記」の中で、このようなケースを、どんな小さなものでも見落とすことなく厳しく取り上げ、反省を迫る。この求道の厳しさ、その奥にある純粹さ、真摯さが、読む人に感銘を与えるのである。

以下この点に焦点を合わせ、いくつかの観点に分けながら、本文を現代語に直して紹介してみよう。「」の中が本文の訳で、後の文は私の簡単な解説である。(一)の中は長円寺本の巻章である。

1 「吾我を離れること、これがまずなされるべきこととがらである。この心にならうと思つたらまず無常であることを思い出したらよい。一生は夢と同じである。時はまたたく間に移ろう。露のような命は消えやすい」(4の3)

「今夜明日、どのような重病にかかつて、東も西も分らなくなる程苦しむかも知れない。またいかなる鬼神の怨害をうけるかも知れず、どのような暴賊に会い、怨敵に会つて殺されるかも知れない。実に不定である」(3の



道元の肖像画

11)

「仏道を学ぶ者は、後日を持って学ぼうと考えてはいけない。今日、只今の時を空しく過ぎないようにし、毎日、毎時勤むべきである」(1の6)

我々が何かをしようとするとき、なかなか一途にその氣になれない時がある。それは、そのことの他に、これもしたい、あれもしたいという自分を認め、そちらの方を大事にするからである。この吾我を離れるには無常を感じるのが第一である。時はどんどん過ぎていく。自分の命はいつきるかも知れない。チャンスを失うと時は待っていない。仏道を学ぶのに万全の準備ができるのを待つ余裕はない。悠長にはいられない。

「頭燃を払う」というコトバがある。毛髪に火のついたとき、我々は一一九番を廻すようなのんびりしたことはしない。他のすべてを忘れて走り出すのである。すでに髪に火がついているぞというのが無常迅速ということである。

2 「仏道を学ぼうとする人は、何を食べるか、何を着るか、そんなことに気を配ってはいけけない」(1の4)

「仏道を学ぶ人は貧乏でなければならない。世の中をみるに、財ある人にはうらみ、恥辱の二つの難がおこってくる。財があれば人が是を取ろうとし、自分は取られまいとして、お互いのうらみ、怒りが生ずる。口論、訴訟となれば遂にはなぐり合いや合戦になる。その間にうらみ、怒り、恥辱が生ずるのである」(4の4)

「仏道を学ぶ人は貧乏でなければいけない。財が多いと学道の志がにぶる」(4の9)

ことがらが1でみたようにせっぱ詰まったものであれば、我々にとって何を食べるか、何を着るか、どのような環境に住むかは二次の問題である。のみならず財は志を鈍らせ、気を散らし、学道の妨げである。ところが今日我々の日常は、この衣糧・富貴の追求こそ人生の目的であるかのように振る舞っている。ことがらは逆さまである。

3 「ある人が、私は病気がちである。そして才能に乏しい。学道を全うできない。だから教えの要点だけ聞いて、一人で静かに隠居して、身体を大切に一生を

終えようと思う、と言う。これは考え違いである。昔のすぐれた祖師たちも、強靱な身体を持っていたわけではない。学道の先輩たちもすべてが才能豊かであつたわけではない。……今生にもし学道修行しないでいて、今度いつ病なく、能力豊かな人として生れ変つて学道できるというのか。身命をかえりみないで発心修行するのが学道の最も肝要な点である」(1の2)

「仏にせよ祖師方にせよ、皆もともとは凡夫であつた。凡夫の時は悪い行いもし、悪い心もち、鈍でもあり、愚かでもあつた。そうであつたけれども改めて師に随つて修行したから仏となり祖師となつた。今の人もそのようにすべきである。愚かである、鈍であるといつて卑下してはいけない。今ここで学ばないでいつ学ぶというのか」(1の13)

緊迫感の中で学道に立ち向かおうとしても、もう一つ心配事がある。自分の能力がそのために十分であるかどうかである。しかしそうではない。ことからはせつば詰まつており、能力を云々すべき場合ではなく、また志さえあればかつて成就されてきたのである。能力に対する疑義は逃げであり、これまた我執である。自己をならうのに能力の有る無しは無関係である。

4 「世の人は多く、善いことを作す時は人に知られようと思ひ、悪事を作す時は人に知られまいと思ふ。だから作した善事には利益がなく、密にした悪事は露見し

罰が下るのである。……人の知らない時に密に善事をして、まちがえて悪事をなしてしまつたらかくさないでそのあやまちを悔むべきだ」(2の15)

「当今、仏道を学ぶ人の多くは、法席において、自分がいかによくそれを理解しているかを人に知られようと、人を感じさせる答の仕方など考えているから、大切なことを聞きのがしてしまふ。これは道を求める心がなく、吾我がそこにあるからである」(1の9)

「学道の人は世間の人に智者であるとかもの知りであるとかいわれてはだめである」(3の9)

「そうであるのに、今の学人僧侶は、人に勝つために法門を学ぼうとする」(6の23)

仏道をならうこと、つまり自己をならうことは、道元の立場から言えば、それ自身が目的であつて、他のすべてに優先して行われるべき、第一義のことである。しかし往々にして第一義であるべきことがらが、他のことからの手段に墮してしまふことがある。純粹でなくなるのである。例えばせつかくの善事が自分の善人であることの顕彰、宣伝という目的の手段になつてしまふ。知識についても、ものを知ること学ぶことが、自分の理解力、博識の誇示という別のことからの手段になつてしまふわけである。例えば私がこの小文を書きながら、読者を感じさせよう、大向こうをうならせようというようなことをひよつと考へてしまふ。純粹さとは難事なのである。この点についても今日の

多数の考えは逆で、なるべく目立つように振る舞い、自己宣伝をし、自分を売り込むことが、かえって美德とされたりする。

5 「仏道を学ぶ人は、自分の見解に執着してはいけない。たとえ自分では分ったと思うことがあっても、もししたら誤解であるかも知れない。自分の見解の他にも正しい見解があるかも知れないとして、広く師をも訪ね、先人の言葉なども調べてみるべきである」(5の1)

「仏道を学ぶ人の第一にすべきことは我見を離れることである」(5の2)

「世間の人は多く言う。師のコトバを聞いたが、私の見解はそれと違います。これは間違っている。例えば、經典のいうことが自分の見解と違う時、經典が間違っていると考えらるだろうか。またもし自分の見解が正しいなら、なぜあらためて師に問うのか。また日常の常識に合っているから自分の見解は正しいのだというかも知れないが、日常世間的な見解はもともと間違いのだ。学道の用心は、自分の見解にちがっていても、師の見解、經典の見解ならば、そちらに従って自分の我見の方を捨て、改めていくことである」(6の14)

「仏道を学ぶ人が悟を得ることができないのは、旧見にこだわってそれから抜け出せないからである」(5の6)

「法話の席で話をよく理解するには、自分がもともと

持っていた見解を、師のコトバに従って次第に改めていけばよい。例えば、仏とは、自分では光輝き、徳の高いものだと思っても、師がもし、仏とはガマやミミズであると言ったら、そのまま仏とはガマのことであると、日頃の見解を捨てなければいけない」(2の10)

今日の我々は、物事は自分で判断するとか、自分で判断しなければ納得できないとか言う。これは最後まで残る我執である。自分で判断できるなら、人に問わなければよいし、また新しい知見を求める必要もない。自分の見解を大切に持ち歩きながら、形式だけは人に教えを請うから、それは教え教わることでなく勝ち負けの勝負になってしまう。あくまで己を空しくしなければいけない。

以上五つの項目に分けて、「正法眼蔵隨闡記」のエッセンスを示したつもりだが、ことはすべて今日の多数派の常識とは正反対の内容である。理解してもらえただろうか。

この本には、もともになる写本が、「面山本」、「長円寺本の二種あり、内容はほぼ同じだが、排列が異なっている。岩波文庫本のもの(和辻哲郎校訂)は前者により、講談社文庫のもの(山崎正一校注)、筑摩選書のもの(水野弥穂子校注)は後者による。後の二つは現代語訳付きで読み易い。